

素直な心が人を伸ばす

校長 木村 滋夫

4月、新しい年度が始まって半年が過ぎました。豊かな心を育てていきたいと教職員一同子どもたちと向かい合ってきました。お陰様で子どもたちは元気に学校生活を送っています。

職員が夏の言語学者の金田一秀穂博士の講演会での話として伝えてくれました。全体の中で、この話が出てきた経緯は分かりませんが、博士がご自身のお子さんの入学に際して、学校を選ぶ基準に「先生が幸せな顔をしている学校を選びました」と話されたとのこと。私たち教職員が楽しくなくて、子どもたちが楽しい訳はありません。親が、自らが幸せであることを感じないで、子どもに幸せを与えることができないのと同じです。本校の教職員はいかがでしょうか。私は、幸せそうな顔をしていると思っています。

先頃、このような場面に会いました。朝、子どもたちが教室へ入った後の昇降口を見ると、靴が一足、三和土の上に置き忘れていました。友だちとの話に夢中になって靴箱に入れるのを忘れたのでしょう。なくなるといけないと思って、空いている靴箱に入れておきました。下校時になって、「靴がないと1年生が……。」と担任を捜しに同学年の先生が職員室へ。朝の靴ではと、昇降口へ行って「この靴かな」「うん」。その後です。それまで不安な気持ちだったと思いますが、次に出てくる言葉は「ありがとうございます」です。嬉しくなっていました。

また、雨の日に傘立てを見ると、整理されて入っています。とりわけ6年生の傘立てが見事だったので、4階へ行くと1クラスが授業の合間だったので入って、「6年生の傘立てがきちんとしていて感心しました」と伝えると、返ってくる言葉が「ありがとうございます」です。このような子どもたちを前にして、我々教職員が幸せを感じないわけがありません。

豊かな心を育むことは、先月号でもふれましたが、幼児期からのご家庭での温かい雰囲気がこのような子どもたちを育てているのだと思います。

右の文章は、4年生の教科書に出てくる童話“ごんぎつね”の作者新美南吉の日記の一文です。“ごんぎつね”では、ひとりぼっちのゴンが、あの手この手で兵十に近づこうとしますが、思いが通じません。そして、あの結末です。それは、新美南吉の人生そのものなのかもしれません。彼の生い立ち、そこから形成された性格からは、ハッピーエンドはないのだと思います。彼のどの作品からも人間不信を色濃く感じます。彼は、不幸を原動力に転化して文学を生みだす力に変えていけたが、普通の人間はおしつぶされてしまうのではないのでしょうか。

愛されなかったので愛することを知らない。熱を加えられなかった物体が、どうして温かくなりえよう。こうして孤児は、子どもであるときも、おとなになってからも、不幸である。

雨と風の暗い夕方、いまその電車で片足を轢断された犬が、坂道をうろついている。家いへの戸はしまっている。

本校の子どもたちは、「愛されているので、愛することを知っている」、まさに夏のヒマワリのように明るく輝いています。自分に自信を持ち、自立しています。当然、素直な心と明るい笑顔でまわりを温かい雰囲気にしてくれます。その素直さと明るさが人を伸ばす基となるのだ信じています。このまま成長して欲しいと願っています。

これからも、子どもたちの主体性を尊重する教育活動の中で、たくさんの発見をし、それを大きな喜びとしていきたいと思っています。

平成19年度も半分が過ぎ、後期に入ります。これからも子どもたちの温かい笑顔があふれるあざみ野第一小学校であり続けられるようご支援をよろしくお願いいたします。